

## サイパン戦車隊員だった下田四郎氏のお話し



サイパン研修中、現地コーディネーター松本ウィリーさんの計らいで、サイパン戦車第九連隊の生存者である下田四郎さんとお会いし、貴重なお話しを伺う機会を得た。

下田さんは、そもそも満州に配属されており、対ソ連国境警備の任務を与えられていたが、戦局が悪化してくると 1944 年 3 月戦車第 9 連隊として 今度は対米戦を戦うべくサイパンへ配属された。とても寒い満州から常夏のサイパンへの異動は戦う環境があまりにも異なり、またサイパンの防備はあまりにも不十分だと感じたそうだ。

サイパンに配属された下田さんと他の日本兵は『サイパンを取られたら日本は敗北が決まる』と思っていたという。下田さんの戦車部隊は攻撃の最前線に立たなければならなかった。兵士は戦車搭乗中に爆撃を受けると、ほどんど死んでしまう。それは戦車の燃料が誘発して爆発を起こすからだ。さらに大砲が当たれば、戦車は炎上し 7～8 時間は燃え続ける。さらにそしてその遺骨はほんの一握りしか残らないほど粉々になってしまう。米軍の大砲は非常に大きく、また米軍の戦車は壁 104 ミリであるのに対し日本の戦車はわずか 25 ミリと到底太刀打ちできるようなものではなかったという。下田さんの戦車部隊は、わずか 4 時間でほぼ全滅状態となった。

日本の武力はアメリカと比べ物にならないくらい弱く、大人と子供が戦うようなものであった、と下田さんは語る。電信柱を黒く塗りつぶし、戦車の砲に見せかけた偽物の戦車がビーチに置かれ、わら人形に兵隊の服を着させたかかしのような偽物の兵隊で威嚇していたという。この時点で力の差は明確であった。下田氏が所属していた戦車第九連隊の総計は 当初 800 人いたそうだが、最終的に 24 人になってしまったという。しかしこの 24 人は、当時の日本兵からすれば「24 人も生還した」という奇跡の数字だった。

下田さんは 「私たちは戦争に負けたとは思っていない」とおっしゃった。続けて 「日本軍は力はあったが、武器がなかった。もし、米軍と同じ兵力があったならまだ勝算はあった」ともおっしゃった。しかし戦争中は いかにもせん食べるものがなかった。

餓死する人が多かったことも力説しておられた。当時、日本から炊いたご飯を詰めたドラム缶を流していたようだが、サイパンに到着する前に米軍に撃たれて沈められてしまったそうだ。

さて下田さんの戦車は撃たれたが、弾はキャタピラにあたり何とか助かり、ジャングルの中に逃げたそうだ。ここから下田さんの500日にわたるジャングルでの逃亡生活が始まる。この間、虫歯やちょっとした病気が、ジャングル生活での逃亡中非常にきついものだったそうだ。1945年8月15-26日の10日間、米軍はジャングルに潜む日本兵たちに、降伏して米軍の捕虜になる猶予を与えた。「発砲しない、日本本土に帰国させる、だから武器を捨てて出てきなさい」という放送を流した。下田さんたち日本兵はそれを信じなかった。日本が敗北という事実が信じられなかったのだ。しかし1945年12月になり、ときどきジャングルから出てみるサイパンは、クリスマスの雰囲気になっていた。不思議に思ったそうだ。そしてついにゴミ箱に入っている週刊誌を読んで終戦を知ったそうだ。こうして下田さんは、ジャングルでの500日間の戦潜伏を終えて、アメリカの捕虜となった。彼らにとって敵であったアメリカ兵は、下田さんたち日本兵に気さくに話しかけてきたので、冗談を言い合ったりしたという。コーヒーとパンと一緒に食べたりもしたという。戦時中よりお互いの距離を縮めていた、と下田さんは語った。

ところでガラパンにある「シュガーキング・パーク」には、当時のサトウキビ列車の先頭部分が残っている。このサトウキビ列車は、終戦以来30年間放置され損傷が激しかった。それを修復したのは下田四郎さんである。サイパンの地に埋まったままの、なつかしい九八式戦車を掘り起こし、日本に持ち帰る許可を北マリアナ政府から得るために、修復を施したのである。戦車が日本に戻ってきたのは、1975年だった。

大正12年生まれの下田さんは、現在86才。精力的にサイパン戦の思い出を執筆して、私たち若い世代に読んでもらおうとしていらっしゃる。「戦争ほどつまらないものはない」という下田さんの言葉をじっくりとかみしめたい。



下田氏の著書